



【主日礼拝説教】 2018年12月9日

説教題 死を前にしてイエス様は祈られた！

聖書 ヨハネによる福音書 17章1～5節
ヨハネの黙示録 22章1～3節

説教 武田 真治

1、イエス様の祈り

今日の箇所は「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。『父よ、時が来ました。』』という言葉で始まっています。今迄「私の時はまだ来ていない」と言われていたがいよいよ「時が来た」と言われます。この後、ユダと兵士たちがイエス様を捕まえに来ます。そして裁判に掛けられ、死刑判決が下され、次の朝には十字架にかけられるのです。しかもイエス様はこれから起こる事をすべて知っておられたが故に「時が来た」と言われているのです。このような切羽詰まった状況に立たされたならば、普通はとても冷静にしておれません。どうにか切り抜ける手立てはないか、免れる手段はないか、逃げる算段を必死に考えるのではないのでしょうか？

2、とりなしの祈り

しかしこの時、イエス様がなさったことは〈祈り〉を献げる時間を持たれたのでした。しかもこの祈りは、残される弟子たちのことを心配して「彼らが一つになりますように」と祈っておられるものです。ご自身のことはほとんど祈っておられません。まさにこれは《とりなしの祈り》です。このご自分の死と直面しておられる時に、ご自身のことではなく他者やこの世を覚えて神様に守って下さいと祈られるのです。

よく日本人の祈りは自分や家族のことだけを願うと言われます。確かに、神社では心ばかりの賽銭を投げ入れ、ほとんどの人が『無病息災、家内安全』と祈ります。それで終わりです。それに対してキリスト教の祈りは自分のことだけでなく悲しみにある方や困難な状況にある方、この世界のためにも祈ります。それこそ《とりなしの祈り》です。伝道者パウロの「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」という教え（ローマの信徒への手紙 12章 15節）はまさにこのようなイエス様のみ姿から発していると言い得ます。何よりこのことを教えられます。

3、「天を仰いで」

更にこのイエス様の祈りから教えられる事は、ここでイエス様が「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えて下さい。」と言われておられるように、これから始まる一連の十字架に関わる出来事を《栄光の時》と見ておられる点です。

どうして、あの酷く悲惨な刑罰である十字架が「あなた（＝神様）の栄光を現す」時と言い得るのでしょうか？





その答えは、ここでイエス様がわざわざ「天を仰いで言われた。」とあることにあります。これを、祈りだから天に目を向けるのは当然だと簡単に考えてしまうとこの大事さを見落としてしまうかもしれません。イエス様が天を仰いで言われたということは、これが天から（＝神様から）見た言葉だということです。言い換えれば、天のまなざしを持って見た時に、十字架が《栄光の時》だと言われているということです。

地上の、この世の評価や判断からすれば十字架は世に逆らった者を処罰する、最も重いみせしめの刑罰です。エルサレムの町中を引き回され、裸にされて十字架に架けられます。しかし、天から見た時には、私たちすべての人の罪の赦しが完成される《栄光の時》なのでした。

この後にイエス様が「わたしは、行うようにとあなたが与えて下さった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、わたしがみもとで持っていたあの栄光を。」と祈られています。まさに、これまでイエス様はその病人の癒しや数々の奇跡の業や、み言葉の伝道を通して神様の栄光、その素晴らしさを人々に伝えて来られました。そのみ業が最高潮に達する時がこの十字架の時だと。だから、この時こそまことの神様の栄光（＝「みもと」にある）をこの時こそ現してくださいと祈っておられるのです。従って、私たちはこのイエス様の十字架にこそ《主の栄光》を見るべきなのです。

どうでしょうか、私がこのイエス様の御祈りから何より学ばされることは、信仰とは天へと目を向けること、天からのまなざしを持って今を生きることに他ならないということです。この世的には評価されないものが実は神様の目から見ると、栄光に包まれているものとされるのです。もし、私たちの生き方をただこの世の評価や観点だけで判断するならば、神様という存在にこだわり、自分にどこかブレーキを掛けながら生きているような人生に人からは見えません。もっと好き勝手に生きれば良いのにとか、なぜそんなことにこだわるのかと言われてもしかたがないでしょう。しかし、私たちは天へと目を向けます。神様がどうぞ覧になっているかを意識しながら生きます。逆に言えば、そのような天からのまなざしこそ、私たちを支え、励まし、導いてくれるものだからです。もしこの天へと目を向けることが欠けて、ただこの世の評価だけで見ってしまうならば、自分自身の信仰も他のクリスチャンの生き方や教会のあり方も分からなくなり、迷い、結局は信じることをやめてしまうということになってしまうでしょう。私たちの信仰はこの《天からのまなざし》を持って生きることに他ならないからです。

そして、そのような天へと私たちの視点に向けさせてくれるものこそ《祈り》なのではないでしょうか？

最も厳しく困難な状況にあったイエス様が、なおそこで為さったことは《祈り》であり、この祈りを通して天へと目を向けられたのでした。そして、これからの十字架への道行きがすべて神様の栄光を現すみ業となることを確認し、思いも新たに歩み出して行かれたのでした。

4、「永遠の命を与える」約束

次にイエス様が祈られたことは「あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができる





のです。」でした。

ここで「すべての人」と訳されている元々の言葉は「すべての肉」という言葉です。単に人間だけが考えられているのではありません。この世の生きとし生ける存在すべて、そこには悪霊や死という最もこの世的な（＝肉的な）存在も含まれていると言い得ます。それらを支配できる権能をお持ちだからこそ、死に勝利することがお出来になり、私たちに「永遠の命を与えることができる」ようになられるのです。そのための十字架であると。故に、これからの十字架への道行きに《主の栄光》を私たちは見ることが出来るのです。

この永遠の命についてイエス様は続けてこう言われます。即ち「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」と。この言葉は弟子たちが永遠の命を理解できるように、弟子たちの立場に立って言われている言葉だと言い得ます。ここでは二つのことが大事です。

一つは、神様とイエス様との関係です。ここでは永遠の命を得るためには、神様とイエス様の両方を知ると言われています。問題はその関係がどうなっているのかという点です。それはここでイエス様が「あなたのお遣わしになった」存在だと言われていることに答えがあります。

永遠の命を得るためには天の神様をちゃんと知っていくことが何より重要なのですが、その神様を知るために、この地上に神様から遣わされた方がイエス様だということですから、このイエス様を通して私たちは神様を知ることであり、それ以外の方法はなかなか難しいということになります。それ故、あたかも神様とイエス様が並べられているような言葉になっているのでしょう。私たちにとってはこのイエス様という方を通じて初めて神様を知ることが出来るということなのです。

そしてもう一つは「知る」という言葉の意味です。聖書の場合、この「知る」という言葉は（旧約聖書の場合もそうですが）単に知識を得るとか学ぶという意味だけでなく、もっと深い交わりに入ることを指します。ある解説者はこの「知る」とは、生きた触れ合いを持って相手と知り合うことだと説いています。そのような交わりを神様と、そして何よりイエス様と私たちが持つということです。それはこの地上で聖書やこの礼拝を通して与えられるイエス様との交わりのことでしょう。この交わりを日々深めて行く時に、永遠の命へと至る道が開かれるということでしょう。まさに「子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与える」のですから！

今日読んで頂きましたヨハネによる黙示録には永遠の命に達した時のことが預言されています。「神と小羊（イエス様）の玉座が都にあって、神の僕たちは神を礼拝し、御顔を仰ぎ見る」と。その時、私たちは直接、神様の「御顔」を見れるのだと。その時をはるかに望みながら、天へと目を向けて生きて行きましょう！

（説教より抜粋、編集）

